

# 市橋文庫蔵『弥生日記』訳注（七）

## 愛知県立大学稀書の会

本学学術情報センター市橋文庫には、岡崎の俳人鶴田卓池と刈谷の俳人中島秋拳が編纂した『弥生日記』の刊本を蔵する。稀書の会では、地域の文化及び文化交流史の考究・紹介を目的として、本学が豊富に蔵する古俳書資料のうちから、この『弥生日記』を選び、その読解に取り組んでいる。今年度の紀要原稿は、卓池・秋拳の弟子たちの来訪とその携えてきた発句を記述した箇所をとりあげた。今年度の担当者は、加藤希（大学院国際文化研究科前期課程二年）、香村彩（大学院国際文化研究科前期課程二年）、狩野一三（名古屋デンタル衛生士学院非常勤講師）であり、伊藤伸江（本学教授）、学部稀書の会の学生も加わり、輪読による討議を経て、年報用に成稿した。

### 【凡例】

- 一、底本は文政七年五月名古屋久兵衛版『弥生日記』愛知県立大学学術情報センター市橋文庫蔵（CH・142）本である。
- 一、翻字本文は、文政七年版を忠実に翻刻した。本文掲出にあたっては、【翻刻】に本稿で扱う箇所を一括掲出し、【本文】に、次項に記すような改訂を加え作成した本文を記し、【注釈】部分には、注釈の便を考慮して適宜分割した形でとりあげた。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点、送り仮名を補った。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（ ）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付し、前句を添えた。

一、訳注においては、【本文】、【季・季語】、【作者】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、俳諧などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じて平仮名に改めた。

### 【翻刻】

花あまたおもひあふてはさきにけり 臥明

遊ふにもよきかこつけやうめの花 桃里

春の月うれしそうなるすかた哉 玉瀨

いま咲た花を相手や月の前 守静

廿日あまりの寓居句なきもおかし

からすとして書すての反古しらへ

する中に

ふつと目のつきそめてより春水 秋挙

神鳴てすくろのすゝき芽立けり

卓池

夜渡しのいまに声あり花さかり

秋拳

塵掃ん花に人来と鳥か啼

卓池

【本文】

花あまたおもひあふてはさきにけり

臥明

遊ぶにもよきかこつけやうめの花

桃里

春の月うれしそうなるすがた哉

玉洵

いま咲いた花を相手や月の前

守静

廿日あまりの寓居、句なきもおかしからずとて、書きすての反古しらべする中に、

ふつと目のつきそめてより春の水

秋拳

神鳴りてすぐろのすすき芽立ちけり

卓池

夜渡しのいまに声あり花ざかり

秋拳

塵掃ん花に人来と鳥が啼く

卓池

【注釈】

花あまたおもひあふてはさきにけり

臥明

【季・季語】春（花）

【作者】臥明 氷亭臥明。『諸国人名録』には、A本・B本・C本ともに見えない。臥明は、方鼎とともに『はなのわたり』（『西三河の俳人中島秋拳』所収）に序文を寄せている。それによると、「予はもとよりのむつび、風雅のちなみ浅

からねぼとて、集のはじめに筆とらんことを宜彦がすすむるにまかせ」と、秋拳と古くからの友人であつて縁が深いために、宜彦からのすすめで記したという。『はなのわたり』には「題花」に「花のある処は水もなつかしき」の句と、「丁亥（※文政十年）春二月五日於十念精舎小祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（「深切な仕なしよ花にいく度も」）。また、『蘆陰集』三でも「同年（※文政十）如月五日於刈谷十念寺追善秋拳翁脇起之百韻」（※『はなのわたり』に見えるものに同じ）に確認することができる（『板倉塞馬全集』による）。

【語釈】 ● おもひあふ…考えが一致する。「つれてとぶはおもひあふたる蛍哉」（玉海集・恵佐・124）。

【現代語訳】 たくさんの花たちは、きつとみな考えがぴったりと合つて、一斉に咲いたのだろうなあ。

（狩野一三）

## 遊ぶにもよきかこつけやうめの花

桃里

【季・季語】 春（うめ）

【作者】 桃里 『諸国人名録』には、B本・三河に「野田村 昌福寺」とある。『はなのわたり』には、「題花」に「花鳥におはれてはやし日の傾き」の句と、「丁亥（※文政十年）春二月五日於十念精舎小祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（「ずつと澄きる水の設置」）。『いははた集』には「茅屋の机上に積つかねし吟」に「鶯をつれに草とる畑かな」の句が、『あさぢ酒』には「四季混雑」に「縄引て霞ませにけり麦島」の句が見える。また、『花鳥曆』（塞馬編刊。安政三年発行。『板倉塞馬全集』による。）立秋に「朝顔の花のとなりや伊吹山」の句が見える。『蘆陰集』三でも「同年（※文政十）如月五日於刈谷十念寺追善秋拳翁脇起之百韻」（※『はなのわたり』に見えるものに同じ。「すつと澄きる水の設置」と、「同年（※天保三）皐月九日於盤立書院興行曙庵超祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（「くむに根気のきれるこし水」）。（『いははた集』以下は『板倉塞馬全集』による）。また、中根棟堂の四十賀に各地の句友から発句が寄せられたが、その中に「桃里（野田）」のものもあるという（『碧南市史料57 三河の俳人中根棟

堂』による)。

【語釈】 ●あそぶ…(詩歌、管弦、舞などを)楽しむ。 ●かこつけ…他のことを口実にすること。「歌合にぞかこつけてよぶ」(新增犬筑波集・貞徳・1650)。

【現代語訳】(俳諧を)楽しむにも良い口実だ、この梅の花は。

【備考】

『板倉塞馬全集』では、桃里について、右の【作者】の項に挙げた句については『諸国人名録』B本に基づく注を付している。その「野田村 昌福寺」は現在の愛知県刈谷市野田町にある。ところで「桃里」の名は、『板倉塞馬全集』所収資料では、他に「嘉永人名録」と、既出の『花鳥曆』の「入集雅名録」の二資料にも確認することができる。これらについて、前者には「尾張・名古屋 黒田六市郎」とあり、後者には名古屋の黒田氏であるとの注が付されている。つまり後者については、『花鳥曆』所収句について付された注とは齟齬が生じていることになる。この名古屋の黒田氏とは、黒田甫(はじめ)、文化十一年(1814)〜明治二十五年(1892)。尾張名古屋藩士。俳諧を黄山にまなび、自身も多くの門人をかかえた人物として知られており、その別号の一つに「桃里」があるという(市橋鐸・服部徳次郎共著『中京俳人考説』(一九七七年三月、東海文学資料刊行会)による)。「続板倉塞馬全集」索引では正編の項目も合わせて参照することができるが、「桃里」の項目を一括して「(明治25没)」としている。しかし、「野田」の桃里と「名古屋」の桃里とが同一人物であるとは考えにくいと思われる。

(狩野一三)

春の月うれしそつなるすがた哉

玉淵

【季・季語】春(春の月)

【作者】玉淵 『諸国人名録』には、B本・三河に「泉 都筑勘四郎」とあり、C本に「同(三河) 泉 都筑官四郎」

とある。『西三河の俳人中島秋拳』の「秋拳年譜」天明六年（一七八六）丙午の項に、「都筑曲江（玉瀾、都築弥厚（和楽）の弟）、三河国和泉（現安城市）に生まれる。」とある。秋拳は文化六年秋、式年遷宮参拝のため伊勢へと赴こうと、同行者十余名と「曲江舎に船待」し、二見へと渡っている（『秋拳句文帖』一〈西三河の俳人中島秋拳』所収）。『あさぢ酒』の「四季混雑」に、「はるの月うれしそうなるすがたかな」と、『弥生日記』所収句と同じ句が収録されている。『あさぢ酒』は、足助の山田真文の三回忌追善集で、秋拳編かとされる（『板倉塞馬全集』による）。山田真文の没年が文政六年であることから、『あさぢ酒』所収句は『弥生日記』からの再録と思われる。

【現代語訳】春の月が、嬉しそうな様子であることよ。

（狩野一三）

いま咲いた花を相手や月の前

守静

【季・季語】春（花）

【作者】守静 『諸国人名録』には、B本・三河に「小垣江 鶴見友吉」とあり（但しミセケチ）、C本に「三河小垣江 鶴見友吉」とある。或いは『弥生日記』にも見える東雅（鶴見氏、小垣江出身）と何らかの縁ある人物かとも思われるが未詳である。『はなのわたり』では、「丁亥（※文政十年）春二月五日於十念精舎小祥忌追福脇起之百韻」への参加が確認できる（「あてはめた供をこととはる司召」）。『いほはた集』には「茅屋の机上に積つかねし吟」に「さる曳のうたひながらや舟渡まで」の句が、『あさぢ酒』には「四季混雑」に「ねはん會の日和ゆるみか蚊のうなり」の句が見える。『蘆陰集』三でも「同年（※文政十）如月五日於刈谷十念寺追善秋拳翁脇起之百韻」（※『はなのわたり』に見えるものと同じ。）への参加が確認できる「あてはめた供をことわる司召」。

【語釈】●相手…ある者に取り合わせる、もう一つの物。「投入や梅の相手は露のたう」（続猿蓑・良品・214）。

【現代語訳】月の前で、今咲いた花と月を取り合わせて見ていることよ。

（狩野一三）

廿日あまりの寓居、句なきもおかしからずとて、書きすての反古しらべする中に、

ふっと目のつきそめてより春の水

秋拳

【季・季語】春（春の水）

【作者】秋拳 安永二年（一七七三）、三河国刈谷藩士中島左守の長男として熊村に生まれる。享和二年（一八〇二）秋拳三十歳のときに、刈谷藩士を致仕し、薙髪して俳諧の道に入った。その後、岡崎の俳友鶴田卓池の手引で、名古屋の井上士朗の門人となった。士朗入門前は「秋居」と号した。曙庵と号し、『曙庵句集』を著した。刈谷市市原神社内に句碑があり、広小路十念寺墓地に墓が、小垣江に曙庵跡がある。卓池とともに『弥生日記』を著した。門下には、三河小垣江の鶴見東雅がいる。本句は『曙庵句集』（春）に入集している。

【語釈】●寓居：仮に身を寄せること。かりずまい。●反古：書き損じたり、不要になったりした紙。●つきそめて：つきはじめて。「つき初しつツミ井いく世春の水」（大発句帳・春部・周桂）。●春の水：春の時節の、雪や氷がとけてのどかな感じに見える水。秋拳の『曙庵句集』（春）には、本句に続けて「幣持てわたる人あり春の水」とある。「養老の山をむかふに春の水」（曙双紙・秋拳）、「行はるの水に鶴啼なにかな」（秋拳句文帖一・文化七庚午廿九日・浪速）、「田にしてもよい山間やはるの水」「山の灯の見えても暮れず春の水」（青々処句集 春54/55）等あり。「春の水」は、秋拳や卓池が好んで使用していた語句だと思われる。

【現代語訳】

二十日あまりの仮住まいなので、まともな句がないのもおかしくはないと言いつつ、書き捨てて不要になった紙をしらべているとその中に、（それこそこんな目についた良い句があったことだ。）

ふと、流れに目が今はじめてとまり、はっと気づけば、もう冬ではなく、春の様子そのものの水の流れであることよ。

（香村彩）

神鳴りてすぐろのすすき芽立ちけり

卓池

【季・季語】春（すぐろのすすき）

【作者】卓池 明和五年（一七六八）、三河国額田郡岡崎菅生村の紺屋の家に生まれる。天明四年（一七八四）、尾張藩の加藤暁台の門に入り、後に井上士朗に師事した。前項の秋挙より五歳年長である。藍叟、青々処と号し、『青々処句集』を著した。天保の俳壇の元老四人を「天保四元老」といい、梅室・蒼虬・鳳朗に並んで卓池も含まれる。天保十四（一八四三）年、卓池七十六歳の折に、門弟の流芝が、『弥生日記』を増補し新版を出した。本句は、『青々処句集』（巻上 春69）に入集している。

【語釈】●神鳴りて：雷が鳴って。『俳人鶴田卓池』に「塞馬筆句集草稿に「初雷」と前書」とある。（cf.初雷：はつかみなり。年明け初の春雷のこと。立春後初の雷を指す場合もある。）「青柳や初雷の雨の後」（井華集・上巻・春水・36）。●すぐろのすすき：「すぐろ」は末黒の略。春の野焼のあとの黒く焦げ残っている薄。「粟津野のすぐろのすすきつめのぐめば冬たちなづむ駒ぞいばゆる」（後拾遺和歌集・巻第一・春上・春駒をよめる・権僧正静円・45）。「寝にくひかすぐろの薄啼雉子」（蕉門名家句集二・北枝・290）。●芽立ち：「芽立ち」は、草木が芽を出すこと。『青々処句集』では「芽ざしけり」とある。『俳人鶴田卓池』の中で、大儀義雄氏は「芽立ちけり」の方が良いとする。語の用例としては「芽立つ」の方が古く、俳諧の用例としても多く見える。「切かぶの芽立を見れば桜哉」（真跡去来文・尾張・27）。

【現代語訳】初めての春雷が鳴って、すぐろのすすきが芽を出してきた。

（香村彩）

夜渡しのいまに声あり花ざかり

秋挙

【季・季語】春（花）

【作者】秋挙



【語釈】●渡し：渡船が発着するところ。渡し場。「渡し場や片足ぬらす春の水」（真跡詠草・蕪村・181）。「鶯もきこゆる戸田の渡しかな」（あなうれし・碓氷嶺下燕亭にて・30）。●いまに：今でも。いまだに。「春尽て椿は今にさかりかな」（水薦刈・許六・969）。●声あり：にぎわっている。「猿牽のやどに声ありけきの秋」（加佐里那止・門瑟・253）。●花さかり：花が満開であること。また、その頃。多く、桜の花のさかりをいう。

【現代語訳】夜の渡し場は夜桜見物の人々で今でもにぎわっている。桜の花盛りに。

【備考】本句は、『はなのわたり』（秋拳一周忌の追善俳諧集）の名称のもとになった句であり、刈谷市司町市原神社内の句碑に刻まれていることから、秋拳の代表句といえよう。『はなのわたり』方鼎の序には、「——小祥之日、各奉詠花之句以酌墓、竟録次為小卷、命以花濟、花濟在叟句中也——」（『尾三古俳書解題』より引用）と、書名の由来が秋拳の句であることが説かれている。『西三河の俳人 中島秋拳』は本句について、「季節は春、桜の花盛り、時刻は夜である。あたりには満開の桜が美しい。夜桜見の客があふれている。渡し場は夜がふけてもにぎわっており、舟出を知らせる声、人を呼ぶ声が絶えない。そういう夜の渡し場のにぎやかな光景である」「夜わたしの今に声あり。」「花ざかり。」と二句一章、眼前の景を点出し、花を背景に置く。視・聴を合わせて渡し場の殷盛いんせいを描く。心はそれへの同感・感動であろうが、なめらかな措辞もそれにふさわしい」と解説している。『刈谷市史』によると、市原神社の辺りまで入海であった頃は、市原から尾州緒川村（現知多郡東浦町）への往来には、市原と緒川村双方から渡船を出していたようである。

（加藤希）

塵掃ん花に人來と鳥が啼く

卓池

【季・季語】春（花）

【作者】卓池

【語釈】●塵掃：…塵を掃こう。「塵掃てまた活ておく柳かな」（蒼虬翁発句・上・春之部・還暦の賀に申おくる・120）。  
 ●人来：「ひとく」は鶯の鳴き声を表している。「梅の花見にこそ来つれ鶯のひとくひとくと厭ひしもをる」（古今和歌集・第十九卷・俳諧歌・読人しらず・101）によつたもの。本句はこの歌の本歌取りである（『俳人鶴田卓池』。「人が来る」の意に掛けて使われ、「人来鳥」は鶯の別名となつている。「鶯も人来と鳴や花の番」（毛吹草・鶯・正利・588）。  
 「鶯やひとくと啼て籠の内」（半化坊発句集・上・春・鶯・32）。●鳥：前項から、「鳥」は鶯をさす。  
 【現代語訳】塵を掃こうと玄関先に出たら、花にとまつている鳥（鶯）が嫌そうに「人来（ひとく）」と鳴いた。  
 【備考】本句は『青々処句集』（巻之上 春）に所収されている。

（加藤希）

【参考文献】

和歌・俳諧の引用は、断らない限り新編国歌大観、新編私家集大成、古典俳文学大系のCD-ROMによる。  
 新日本古典文学大系『芭蕉七部集』（平成二年・岩波書店）  
 大磯義雄『俳人鶴田卓池』（昭和六一年・本阿弥書店）  
 谷澤靖・永田友市『西三河の俳人 中島秋拳』（昭和五七年・西村書房）  
 さるみの会編『尾三古俳書解題』（昭和五七年・藤園堂書店）  
 『碧南市史料57 三河の俳人 中根椋堂』（平成二年三月・碧南市史編纂会）  
 久保田淳・平田喜信校注『新日本古典文学大系 後拾遺和歌集』（平成六年・岩波書店）  
 井本農一ら校注・訳『新編日本古典文学全集 松尾芭蕉集②』（平成九年・小学館）  
 刈谷市史編さん編集委員会『刈谷市史 第二卷 本文（近世）』（平成六年）  
 小沢正夫・松田成穂校注・訳『新編日本古典文学全集 古今和歌集』（平成八年・小学館）

平成三十一年度（令和元年度） 稀書の会実地踏査

伊藤伸江

【踏査日時】 令和二年二月二十七日（木） 午後二時～午後四時

【踏査内容】 テーマ・絵俳書を考える

稀書の会では、本年度に愛知県立芸術大学芸術資料館学芸員金子明代氏がお借りしている大鶴庵塊翁撰『艸名集』に関して、序文の内容に関して同氏のおたずねを得て議論をする機会を持った。『艸名集』は、稀書の会が輪読している『弥生日記』とかなり近い文化圏で作られた書であるが、多くの句を載せる博物学的な情報量の多さや、精緻な植物の図譜から、絵俳書と簡単に位置付けることはしにくいように見え、序文からもやや趣味に走った書とみられていたことが読み取れるように思われる。こうした感覚を文章から抱きつつ、絵師の筆致や、絵師の作品の使用状況に着目する美術史の研究者と議論することは非常に刺激的であり、今年度の実地踏査では、『艸名集』を拝見し、愛知県立芸術大学図書館所蔵の、絵俳書理解に利用すると思われる古典籍の閲覧を学習用に組み込んだ。また、模写をするということに関して、法隆寺金堂壁画模写展示館にて、説明をいただきながら理解を深めた。

【スケジュール】

愛知県立芸術大学芸術資料館

①『艸名集』 拝見

愛知県立芸術大学図書館蔵古典籍閲覧

『絵本福寿草』・『狂画苑』・『手競面譜』・『六々庵発句集』等

その他絵巻模写類

←

## 法隆寺金堂壁画模写展示館

## ② 法隆寺金堂壁画模写見学及び説明

## 【参加者】

伊藤伸江・狩野一三・加藤希・黒川奈津・関井詩織・伊藤彩乃・村田萌愛・梶原真衣・小山ゆり香・チャップマン花梨



法隆寺金堂壁画模写展示館へ